筧先生からの言葉

松本安生

筧先生と私は同じ平成９年４月にこの神奈川大学外国語学部に着任しました。当時、私はまだ大学の助手を１年半勤めた経験があるだけで、社会人としても、また研究者としても右も左も分らない状態でした。そのような私を親切に教え、助けてくれたのが筧先生でした。弟が兄を頼るように、私は学校のことで困ったことや悩みがあればすぐに、私の研究室から歩いて10歩程度の筧先生の研究室を訪ね、相談にのってもらっていました。筧先生はどんなときにも私を快く迎えてくれただけでなく、私の代わりに面倒なことを引き受けてくれることも多々ありました。

ある日、筧先生は私が鹿児島県の屋久島でフィールド調査を行っていることを知り、私に新井白石の『西洋紀聞』を貸してくれました。怪訝な顔をしている私に、筧先生は「なんだそんなことも知らないのか？」と言って、その本の成り立ちを解説して下さいました。『西洋紀聞』は新井白石が六代将軍家宣の命を受けある男を取り調べたこ

とから生まれた名著であること、この男の名はジョバァンニ・バッティスタ・シドチといい、一七〇八年に屋久島にキリスト教宣教師として潜入上陸したが、この島の役人に捕らえられ、すぐに長崎、やがて江戸へと連行されたこと、屋久島には今でもシドチ上陸の記念碑があることなどを私は彼の説明から、そして借りて読んだこの本から知りました。私がクリスチャンであることも知っての、「なんだそんなことも知らないのか？」であったようです。

しかし、この『西洋紀聞』をゼミナールでも取り上げていらした筧先生は、そうした言葉以上にこの本を通じて私に何かを言いたかったようにも思います。シドチは日本に来る以前、マニラにおいて教会学校の建設に尽力していました。ローマから送られる支配的な修道士たちの反対に決して屈せず、地元の人々と共に土地を切り開き、この学校建設のために戦っていたと言われています。最近の環境ブームのなかで大いに注目されている屋久島ですが、研究者もまた中央や外からの押しつけに踊らされたり、屈することなく、地元の人々と共に働き、島の人々がほんとうに望むものを手助けすべきであると、筧先生の日頃の研究態度とともに、この本は私に筧先生の研究者としての思いを教えてくれている気がします。

筧先生が亡くなられた後、私は筧先生の奥様にお願いして、借りたままであったこの本を譲っていただきました。それは、筧先生の心優しい助けと、この本を通じて感じる筧先生の思いを、彼からの言葉としていつまでも忘れないためです。